

平成 22 年 5 月 13 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19791726
 研究課題名（和文）地域を基盤とした心臓リハビリテーションシステムにおける継続的支援の実施と評価
 研究課題名（英文）Evaluation of continuing education and support program in community-based cardiac rehabilitation system

研究代表者
 山田 緑（YAMADA MIDORI）
 東邦大学・医学部・准教授
 研究者番号：00339772

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域を基盤とした心臓リハビリテーションシステムにおける継続的支援を考案・実施し、その評価を行っていくことを目的とし、わが国において心臓リハビリテーションに取り組む患者が長期的にそれを継続していくための新たな枠組みを検討するものである。基礎調査およびワーキンググループによる討議を通して、継続的支援プログラムを開発し、心疾患患者を対象に介入研究を実施した結果、身体的データについて、プログラム前後で有意に対象者の運動時間が増加するという成果が認められた。

研究成果の概要（英文）：The objective of the present study was to evaluate of continuing education and support program in community-based cardiac rehabilitation system, and to investigate a new frame for long-term exercise adherence in patients who participate in cardiac rehabilitation in Japan. The intervention program was developed through a basic research outcome and a working group discussion, and was fulfilled in heart disease patients. The result that exercise time in heart disease patients increased significantly before and after the program was identified in the present study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	810,000	4,010,000

研究分野：循環器看護

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：心臓リハビリテーション、継続的支援、運動療法、健康増進、疾病予防、臨床看護、介入研究

1. 研究開始当初の背景

心疾患による死亡者は年間 15 万人を超え、全死亡の 15%以上を占める。その中で、医療技術の進歩により、虚血性心疾患患者の予後は著しく改善し、回復期における患者にとって、残された心機能の改善や再発予防は重要な課題となっている。わが国においては、1994 年に心臓リハビリテーションの健康保険適応が認められ、現在では疾患の適応範囲も拡大されている。しかし、継続的心臓リハビリテーションは心疾患患者の生命予後を 20~25%改善し、同時に QOL を高める医学的エビデンスがあるにもかかわらず、現在医療保険が適応されるのはわずか 5 ヶ月間である。したがって、保険期間終了後の心疾患患者に対しては継続的なリハビリテーションを行うための新たな枠組みが必要であり、距離的・経済的にアクセスのしやすい、地域を基盤とした心臓リハビリテーションシステムの構築が NPO を中心に試みられている。運動療法を中心とした心臓リハビリテーションによる効果を獲得するためには、患者が長期的にそれに取り組んでいくことが重要であり、本研究においてはそのための継続的支援を考案・実施し、その評価を行っていく。

2. 研究の目的

(1) わが国における心臓リハビリテーションシステムの現状と特徴、ケア提供のあり方と課題を明確にするために、地域を基盤とした心臓リハビリテーション活動を行っている専門団体におけるケア提供の現状と課題を把握する。

(2) 上記の基礎調査の結果から、運動継続に関する因果モデルの構成概念に基づき、継続的支援の内容および要素を抽出し、それらを構造化したプログラムを考案する。

(3) 継続的支援プログラム試案を実践適用し、介入研究によりプログラムの妥当性・実

用性について検討する。

3. 研究の方法

(1) 基礎調査

①文献レビューによる継続的支援プログラムの内容および要素の検討

②関連施設の視察調査およびヒアリング調査

(2) ワーキンググループによる継続的支援プログラムの内容分析と要素の抽出

(3) 継続的支援プログラムの実施と評価

①介入研究：調査施設において対象者への介入研究を行い、継続的支援プログラムを導入する事前と事後に関して測定・評価を行った。収集されたデータについては、多変量統計アプローチによる分析を実施した。

②継続的支援プログラムの精練：介入研究の分析結果に基づき、継続的支援プログラムの妥当性ならびに適切性を評価した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

①初年度は、患者の運動の継続を促す継続的支援プログラム試案を考案することを目指し、第 1 段階として統合的レビューを行い、Medline を中心とした国内外のデータベースから継続的支援に関わる有効な内容および要素を抽出した。その結果、対象者の動機づけを強化するアプローチ、医療者による長期的で専門的な指導、重要他者からの社会的支援などが抽出された。次に、第 2 段階として地域密着型の心リハを実践している施設の視察及びヒアリング調査を実施した。調査データについては、循環器看護に精通する看護師からなるワーキンググループと共に質的な分析を行った。継続的支援として、医療者は心リハという集団療法の中で〔集団の中での場作り〕を念頭に、同時に〔患者の個別性を重んじたケアの提供〕を心がけ、〔安全か

つ患者が楽しむことのできる療法の実施]を行っていく必要のあることがわかった。さらに、それらの援助を提供するためには、[心リハチームにおける専門性の認識と活用][各自の役割および責任の理解と分担][患者情報の共有][自己管理を目標とした患者教育]などが重要であった。以上のことから、安全かつ効果的な心リハを展開するためには、患者の状態が十分に把握できるネットワークの形成、専門職間でスムーズな連携・協働をしていくための仕組みづくりが必要であると考えられた。また、集団療法の中でも個別性を重視した患者教育が重要であることが明らかとなった。

②2年目は、前年度からの文献的考察ならびにフィールドワークの結果をもとに作成した介入プログラムについて、実践適用できるようにその内容をさらに精練した。長期的な展望としては、対象者の心リハの継続、すなわち、アドヒアランスを高めることを目標に、基盤となる手法として、教育的、認知・行動的アプローチを採用した。介入プログラムは、対象者が【運動療法を自己管理していくために必要な知識や技術に気づくこと】、【運動療法を安全に、かつ楽しむことができるように、体調の変化や運動による負荷に機能的に対応できるような知識態度を習得すること】、【心リハチームとのつながりの中で個々の能力や特性を発揮していると感じられること】のできる内容となるよう構造化した。また、介入プログラムで使用する患者教育用キット用品(DVD、心リハ手帳)の開発を行い、その妥当性について検証した。

③最終年度は、継続的支援プログラム試案を実践適用し、介入研究により本プログラムの妥当性・実用性について検討を行った。本研究に関する説明を行い、了承の上で同意書を提出した対象者は5名、平均年齢は59.2歳

(平均身長163.8cm、平均体重65.8kg)であった。このうち脱落者は1名で、分析対象から除外した。介入の評価指標に関しては、身体的データとしてライフコーダ(歩数、運動量、消費量、運動時間、距離等)と、心理・社会的データとして山田が作成した「運動の継続に影響する要因尺度」を使用した。評価時期は、<リクルートー第1回目プログラム前(介入前)>、<第2回目プログラムー第3回目プログラム(介入後)>の2時点とした。身体的データについては、介入前後で運動時間に有意差が認められた。T検定の結果、検定統計量t値-7.40(有意確率p値0.005)となり、運動時間は介入前の23.24時間/週から介入後は28.62時間/週と有意に増加した。一方、心理・社会的データに関しては、介入前後のどの経時変化を比較しても有意差が認められなかった。プログラムの内容については、対象者による主観的評価から鑑みると、各回の目標や内容、方法のレベルは適切であり、プログラム自体が意義のあるものであったことが推察された。

(2) 得られた結果の国内外における位置づけとインパクト

心臓リハビリテーションは、虚血性心疾患患者の生命予後を規定する因子として脚光を浴びており、循環器疾患の新たな治療法のひとつとして考えられている。虚血性心疾患患者における運動の効果については、心臓リハビリテーションに関連した様々な研究によって科学的に実証されている。医療費の抑制策が積極的に推進されている米国では、地域密着型のリハビリテーションプログラム、プライベートなリハビリテーション施設など様々な施設があり、その効果について報告した研究がいくつか認められる。しかし、それらの報告も、心臓リハビリテーションに対する患者の遵守状況を問題として取り上げて

おり、継続的支援に関しては大きな課題となっている。国内において、地域を基盤とした心臓リハビリテーションにおける継続的支援に関しては、この2～3年に心臓リハビリテーション学会学術集会において現状報告がなされる程度に留まっている。本研究は移行期にある心疾患患者に焦点を当て、患者のQOLや医療の連携のあり方から継続的支援の有効性の検討を目指しており、この分野における先駆的な研究といえる。

(3) 今後の展望

今後強化すべき研究課題を検討した。①運動の継続に関する因果モデルならびに患者主導の援助プログラムは、医療の質を高め患者中心の医療への移行を推進する原動力となると考えられるが、その適用に際しては、人的・環境的資源の整備・調整が不可欠であり、新たな支援体制の方法や内容に関する検討が必要である。②心臓リハビリテーションへの患者の主体的な取り組みを促進するためのアプローチは、医療者の協働により行われるべきものである。それらのことにより、医療の一連の過程を心疾患患者が主体的に歩むための継続的な支援体制が構築していくものとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①山田緑、小松浩子、虚血性心疾患患者の運動の継続に影響する要因の検討、聖路加看護学会誌、査読有、11巻1号、2007、53-61

②山田緑、慢性疾患患者のアドヒアランス、日本循環器看護学会誌、査読無、3巻1号、2007、43-44

③山田緑、ローカス・オブ・コントロール、月刊ナーシング、査読無、27巻12号、2007、50-53

[学会発表] (計2件)

①山田緑、長谷川恵美子、リハビリ看護スキルアップ；行動変容から行動維持を支えるコツ、第15回日本心臓リハビリテーション学会学術集会、2009年7月19日、東京

②山田緑、北島泰子、池亀俊美、福田美和子、伊東春樹、心臓リハビリテーション維持期における継続的支援の現状と課題—心リハスタッフへのヒアリング調査を通して—、第13回聖路加看護学会学術集会、2008年9月27日、東京

[図書] (計3件)

①伊東春樹監修、中山書店、心臓リハビリテーション 知っておくべきTips、2008、62-63

②伊東春樹監修、中山書店、心臓リハビリテーション現場で役立つTips、2008、108-110

③NP0 法人ジャパンハートクラブ濱本紘・野原隆司監修、最新医学社、心臓リハビリテーション昨日・今日・明日、2007、87-93

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 緑 (YAMADA MIDORI)

東邦大学・医学部・准教授

研究者番号：00339772

(2) 研究協力者

福田 美和子 (FUKUDA MIWAKO)

東邦大学・医学部・准教授

研究者番号：80318873

北島 泰子 (KITAJIMA YASUKO)

東京有明医療大学・看護学部・

助教

研究者番号：30434434